

# 今、この人に Interview

三重県国際交流財団 専門員 上原 ジャンカルロ さん



## 外国籍の人たちが、自分自身を自分で認め 母国に誇りを持って生きていける 社会をつくりたい

### ■10歳で初来日されましたが、日本語はそのとき覚えたのですか？

長野県に来て、小学校の日本語教室で一から教えてもらいました。でも中学に進学するとそれがなくなり、言葉が通じないストレスで不登校になりかけたんです。そこで学校の先生と相談して、小学校の日本語教室に戻って1年間基礎をしっかりと勉強した後、もう一度中学1年からやり直すことになり、そこで日本語の力を身につけることができました。

### ■23歳で再来日されたきっかけは？

甲賀市で働いていた父や長野にいた頃にお世話になった日本語教室の三澤明石先生を訪問するため、長期休暇を取って来日しました。そのとき10年ぶりなのに日本語がすらすら出てきて自分でもびっくりしたんです。それで、これなら日本で仕事が出来ると思い、休暇後4、5か月悩んだ末にペルーの会社を辞めて日本に来ました。そして、甲賀市の工場で5年間仕事をしました。その間に日本語や英語を磨けばもっといい仕事ができると思い、勉強して日本語能力試験2級と英検2級を取得し、2011年に湖南省国際交流協会の相談員になって2年間働きました。

### ■三重県国際交流財団では、どんな仕事をしているのですか？

最初は相談員の募集に応募して入りましたが、その後専門員の方が退職されたので、もう一度改めて専門員に応募しました。今は正規職員である専門員として、主に医療通訳の育成事業と災害時の外国人支援事業の仕事を担当しています。また5月に開催された伊勢・志摩サミットでは、財団が三重県から外国語の通訳ボランティアを各駅に配置するという事業を委託され、昨年10月からボランティアの育成や語学研修に取り組んできました。無事に終わってほっとしているところです。

### ■滋賀で暮らしておられますが、コミュニティの中へはどのように入っておられますか？

自治会では4年後に持ち回りで組長の役が回ってくる予定なのですが、役員さんに「飛ばしましょうか」と言われ、外国人に役に任せるのには少し遠慮があるのかなと思いました。防災訓練などにも積極的に参加することで、地域に日本語が話せないあるいは防災知識がない外国人がいるということを知ってもらいたいですね。コミュニケーションということでは、母がこの前来日したときに甲賀市の水口城跡に行き、係の女性が、言葉が通じなくても一生懸命母に話しかけて、折り紙を作ってくれて、そのふれ合いが来日して一番楽しかったと言っていました。やはり現地の人とのふれあいや会話は大切だなと感じました。

### ■一方、外国人が日本で暮らす上での課題はありますか？

企業での外国人労働者の待遇です。これまでも、会社で社会保険や雇用保険がかけられていないという相談を受けたこともあります。職種にも壁があり、外国人の一番いい仕事は通訳で、日本人と同じ成績だからといって同じ職種の仕事ができるとは限らない、とも感じています。このような企業の外国人に対する考え方を変えることが、これからの課題ではないでしょうか。

### ■これからもずっと滋賀に関わっていきたいですか？

実は三重県内でアパートを探したこともあったのですが、気に入った物件は外国人を取り扱っていないという理由で断られました。幸い甲賀市内でいいところが見つかり、今はそこから三重まで電車通勤をしています。縁があって三重で仕事をして滋賀で暮らすことになりましたが、滋賀には外国人と交流している「鹿深deござれ」という市民団体に入って活動するな

### ●プロフィール●

ペルー出身の日系3世。33歳。10歳のとき家族で来日し長野県で暮らすのが2年後、家庭の事情で帰国し、ペルーで大学を卒業し就職。2006年に再来日し日本に住むことを決意。工場でラインリーダー、通訳として5年間働く。2011年から湖南省国際交流協会の相談員に。2012年、びわこ日本語ネットワーク主催の外国人によるスピーチ大会で最優秀賞受賞。2014年から三重県国際交流財団で勤務している。ブラジル出身の妻、12歳の娘との3人家族でまもなく2人目の子どもが家族に加わる予定。

ど、自分のやりたいことができる場所があるので、両方の地域に関わり続けたいと思っています。

### ■今後の目標を教えてください。

娘が今小学6年生なのですが、最近日本語しか話そうとしなくなりました。本当なら日本語、ポルトガル語とスペイン語を話す能力を持っているのですが、自分は日本語オンリーで話したいようです。これまで相談を受けた人の中にも、仕事、残業で忙しく子どもと接する時間がなかったために、子どもが母語を覚えられず、日本語しか話せなくなって、親子で会話ができないという人がいました。幸い、専門的なケアのできる施設を紹介してその家族は関係回復ができましたが、言葉の問題で家族が壊れてしまうケースもあるようです。私の場合は、10歳で来日したとき、母がよくペルーに電話して私に親戚と話をさせましたが、今思えば、そうやって母国とのつながりを作ってくれていたんです。私もそのように、自分の子どもには外国にルーツを持つ自分自身を認め、誇りが持てる社会人に育てたいですね。最近、ペルーの民族舞踊マリネラを教える教室など、母国の言葉や文化に触れる場所が作られています。それも誇りを持つ上でとても大切だと思うので、そうした文化活動を支援していきたいと思っています。